通算第１４７号

防衛研究所ニュース　２０１０年１０月号

“NIDS NEWS”

防衛研究所企画室編集（03–3713–5912）

・・・・・２０１０年１０月の主な出来事・・・・・

《 第９回戦争史研究国際フォーラムの開催 》

９月２９日、今年度の戦争史研究国際フォーラムが、都市センターホテル（千代田区）を会場として開催されました。本フォーラムは、防衛研究所創立５０周年を契機に平成１４年から始まり、今回で９回目になります。

今年度のフォーラムは「太平洋戦争と枢軸国の戦略――ドイツを中心に」と題し、第二次世界大戦及び太平洋戦争における枢軸国側及びソ連の戦略を比較分析し、この戦争の全体像を時系列的に考察することを目的に開催されました。冒頭、三宅正樹氏（明治大学名誉教授）が「日

独伊三国同盟とユーラシア大陸ブロック構想」と題し基調講演を行いました。

第１セッション「ドイツの戦争と日本」における発表者と題目は、ゲルハルト・ヒルシュヘルト氏（シュトゥットガルト大学教授）「ヒトラーの戦争目的」、田嶋信雄氏（成城大学教授）「日本から見たドイツの戦争」の順に実施されました。これらの発表の後、庄司潤一郎（戦史部上席研究官）がコメントを行いました。

第２セッション「日独伊三国軍事同盟とソ連の対応」における発表者と題目は、ヨースト・デュルファー氏（ケルン大学教授）「ドイツと三国軍事同盟」、ニコラ・ラバンカ氏（シエナ大学教授）「イタリアと三国軍事同盟」、相澤淳（戦史部第２戦史研究室長）「日本と三国軍事同盟」、ワシーリー・モロジャコフ氏（拓殖大学日本文化研究所客員教授）「ソ連と三国軍事同盟」でした。これらの発表の後、立川京一（戦史部第１戦史研究室主任研究官）と和田朋幸（戦史部第１戦史研究室所員）がコメントを行いました。

最後に、戸部良一氏（国際日本文化研究センター教授）が「20 世紀における日本の同盟政策」について総括講演を行いました。聴講者は一般の方々も含め、約２３０名に及び、盛況のうちに終了しました（フォーラムの実施概要等については、防研ウェブサイト＜www.nids.go.jp＞をご参照ください）。

《 第５８期一般課程 》

訓示を述べる榛葉防衛副大臣（当時）

９月６日から来年６月２４日までの間、行（一）７級若しくは６級又はこれに相当する事務官等、１佐又は２佐の幹部自衛官のほか、国の機関、民間企業及び留学生の研修員を対象として第５８期一般課程が始まりました。

本課程は「安全保障及び国の防衛に関する知識を修得するとともに、内外情勢の動向等を分析・検討し、軍事的な視点のみならず政策的な視点の下で、我が国の安全保障問題を総合的に考察させる」ことを目標としています。

６日の入所式では、榛葉防衛副大臣（当時）をはじめ、省内外のご来賓出席の下、枡田防衛研究所長の式辞に続き、防衛副大臣訓示、統合幕僚長祝辞（河野統合幕僚副長代読）をいただきました。

式辞を述べる枡田所長

９月は第１学期として「国際安全保障論」、「戦略理論」、「軍備管理・軍縮・不拡散」、「米国の安全保障政策」、「東アジアの安全保障１」、「法と安全保障」、「戦争史原論」及び「冷戦と日本の安全保障政策」の各講座等を実施しました。

《 平成２２年度Ⅰ種職員研修 》

７月１２日から始まった平成２２年度Ⅰ種職員研修が、９月２９日をもって修了しました。２７日、２８日には、本研修の集大成となる研究論文発表会を実施し、最終日の修了行事では、枡田防衛研究所長から研修員一人一人に修了証書が授与され、約３ヶ月の研修を終えました。

《 ＨＰ掲載出版物のお知らせ 》

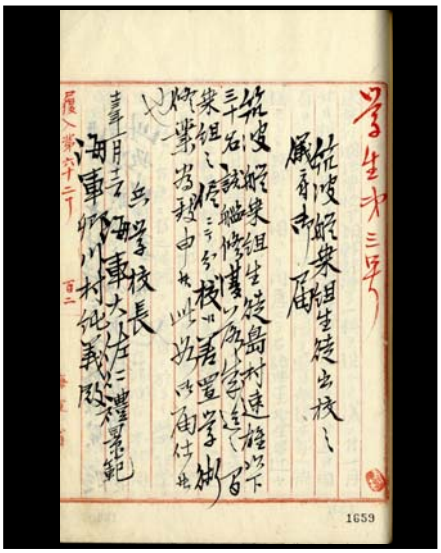
NIDS コメンタリー第 14 号

「宇宙利用をめぐる３つのＣ―暫定版「宇宙態勢の見直し」にみるオバマ政権の宇宙環境認識―」

・・・・「史料紹介コーナー」・・・・

平成 22 年度は、日露戦争に参加した軍人の中から毎号一人を取り上げて、図書館史料室が所蔵するその人物の関連史料を紹介しています。

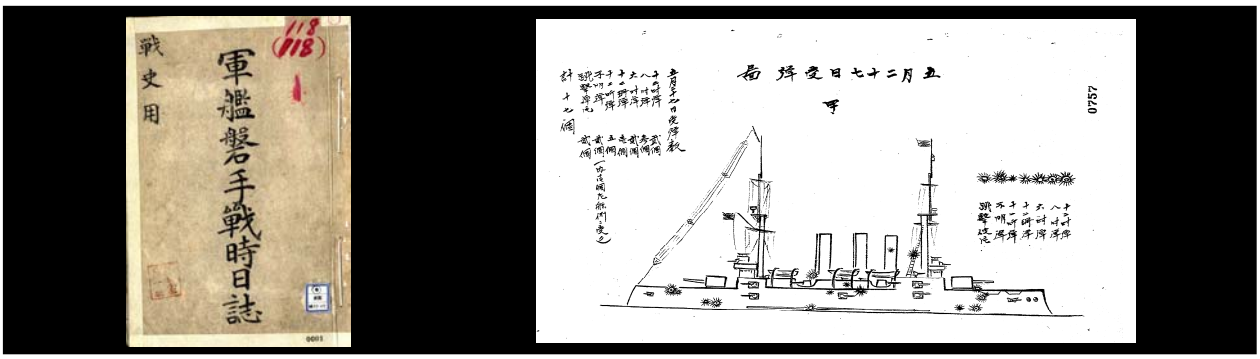
《　島村（しまむら）　速雄（はやお） 1858～1923年 》
－東郷元帥を補佐し、日本海海戦を戦隊指揮官として勇戦した智将－



筑波艦乗組生徒出校之儀ニ付御届

（登録番号：海軍省－公文類纂－M13－20－522）

島村速雄（後の元帥）は明治 7 年、第 7 期生として海軍兵学寮（明治 9 年に兵学校と改称）に入学しました。島村は大変に優秀で卒業時には首席でした。この史料は、島村が同期の加藤友三郎（後の元帥、首相兼海相）らとともに、練習艦「筑波」に乗艦し実地練習に出た時のものです。実地練習中「筑波」は修理のため横須賀に入港しましたが、「筑波艦乗組生徒島村速雄以下三十名」については乗組のまま同艦の修理が終了するまで分校において学術修業する旨の報告がなされています。



軍艦磐手戦時日誌　（登録番号：海軍省－日露－M37－117）

日露戦争開戦時、島村大佐は連合艦隊参謀長でしたが、その後、少将となり第 2 戦隊司令官として旗艦「磐手」に乗艦し日本海海戦を戦いました。同海戦において「磐手」は多数の敵砲弾を受けました。「軍艦磐手戦時日誌二止」の中の「五月二十七日受弾図」には、各種火砲による被弾（17 箇所）状況が描かれており、戦闘の激しさを物語っています。その後も「磐手」は昭和 20 年 7 月、呉軍港において米軍の攻撃によりその生涯を閉じるまで活躍しました。

《お知らせ》

史料保存のためのマイクロ撮影にともない一時的に閲覧できない史料があります。
詳しくは、防研ウェブサイト「お知らせ」をご覧下さい。

※　記事に関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。なお、記事の無断引用はお断りします。
防衛研究所企画室
専用線：８－６７－６５２２、６５８８　　外　線：０３－３７１３－５９１２
ＦＡＸ：０３－３７１３－６１４９　　E-mail：nidsnews@nids.go.jp
※　防衛研究所ウェブサイト：http://www.nids.go.jp